

世界史教科書から現代を見直す

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 土田 浩

私は高校時代、世界史が好きだった。経済・社会や国際関係に興味を持ったという意味では、私の原点とも言える。

世界史の教科書を読むとき、国家が形成・確立されるプロセスは、とても分かりやすい。まず、国家や宗教勢力などの戦争、階級間の闘争（革命）が年号順に記述され、続いて、勝者が経済力を持った理由や社会思想の潮流などが説明される。

それに対して、理解が難しいのは、大国が衰退・崩壊するプロセスの説明である。最近、改めて読み返してみても、これは示唆に富むと思われたので、少しだけご紹介したい。引用は、定番の山川出版社・詳説世界史B（2002年4月4日文科科学省検定済版）からである。



■ 古代ギリシャ—市民と奴隷

「市民には貴族と平民の区別があった…が、『平民』は貴族に従属せず、貴族と同様、土地や奴隷を所有する独立した市民であって、市民どうしの関係は平等が原則であった。他方、『奴隷』は人格を認められず売買の対象となり、市民と奴隷との身分差は大きかった。奴隷は借財によって市民身分から転落した人や戦争捕虜、海外から輸入される異民族などであった。」

⇒ 今日、「俺は社畜」と嘆きながら働いている人たちは、古代ギリシャの『平民』と『奴隷』、どちらに近いでしょうか？



■ 中世ヨーロッパ—封建社会の衰退

「商業と都市が発展し貨幣経済が浸透するにつれて、荘園にもとづく経済体制はくずれはじめた。…14世紀にはいと気候が寒冷化し、凶作や飢饉、黒死病（ペスト）の流行、あいつぐ戦乱（筆者注：ジャンヌ・ダルクが活躍した英仏百年戦争等）などで農業人口が減少した。…経済的に困窮した領主がふたたび農民への束縛を強めようとする、農民たちはこれに抵抗し、農奴制の廃止などを要求して各地で大規模な農民一揆をおこした。…14～15世紀には火砲が発明されて戦術が変化すると、かつて一騎打ち戦の花形であった騎士（中小領主）は必要とされなくなり、彼らはますます没落した。」

⇒ 気候変動、伝染病、大国間の覇権争い、技術革新などが影響して、搾取の強化とそれへの抵抗が起きたという史実に、何か思い当たることはないでしょうか？

■ 産業革命—資本主義体制の確立と社会問題

「産業革命の結果、重大な変化をせまられ、人間の生活感情や価値観も変化した。…分業がすすんで、女性や子供も工場や鉱山で働くことが可能となったが、当時の資本家の多くは利潤の追求を優先して、労働者に不衛生な生活環境のもとでの長時間労働と低賃金を強制した。」

⇒ 産業革命と資本主義については、今日よく語られています。本コラム28・「資本主義の本質を問い直す」（ぶぎんレポート2020年10月号）もご覧ください。産業革命といえば、自由・平等・人権を理念とする近代先進国家での話ですが、いかがでしょうか？



未来の高校世界史の教科書では、世界で繰り広げられている今日の諸事象を、どのように解釈し、後世の若者に語り継ぐことになるのでしょうか？ついそんなことが気になってしまうこの頃です。